

## 2016（平成28）年度 神戸親和女子大学附属親和幼稚園 学校評価について

神戸親和女子大学附属親和幼稚園は、2016（平成28）年4月に開設されました。開設に際しまして、譲渡していただきました学校法人慈愛学園様には、ご尽力を賜りました。ついては、学校法人慈愛学園様が育てられました教育の理念や方針を継承するとともに、さらなる幼稚園の教育の充実を目指すよう努力してまいりました。また、大学との綿密な連携の基に、教育を行っています。

なお、本園は、開園にあたって、米国やカナダの附属幼稚園、小学校をもつ大学で組織される「国際附属校圏協会」に加盟しています。今後、子どもの自主性を重んじる世界基準の幼児教育を共有し、世界を視野に入れた教育を目指しています。

神戸親和女子大学附属親和幼稚園の教育理念と教育の方針は次の通りです。

### 【教育理念】

- 子どもの生涯にわたる人格形成の基礎を培う。
- 子どもたち一人一人のかけがえのなさを基本とし、子どもの命が輝くように支援する。
- 子どもたちがともに育ちあい、学びあう教育を展開する。
- 子ども、保育者、保護者が互いに尊重しあえるような教育的な雰囲気をつくりだす。
- 幼児教育研究推進の拠点となる。

### 【教育の方針】

- 生きる力の基礎を培う教育を行う。
- 知・徳・体のバランスのとれた全人教育を行う。
- 幼稚園と大学が連携し、幼稚園教育要領に基づいた教育を行う。
- 保護者との緊密な連携協力のもとに教育を行う。
- 地域に根ざし、地域に開かれた教育を行う。

平成28年度は、「教育理念・教育の方針」から、それぞれの「項目」「重点目標」を設定し、「取組状況・成果・課題」として評価を行い、「改善策」を示し、自己点検・評価としました。また、幼稚園運営委員会でいただいたご意見も合わせて、神戸親和女子大学附属親和幼稚園の学校評価としてまとめています。

神戸親和女子大学附属親和幼稚園は学校評価を通じて、課題を探り、今後課題に向かって保育に精進し、より質の高い保育を目指します。

これからも、一人ひとりの命が輝くように子どもたちを大切に育て、保護者・地域・大学関係者等と共に連携しながら、世界的に通用する幼児教育実践の場となるよう努めていきます。

今後とも神戸親和女子大学附属親和幼稚園に皆様のご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2017年3月31日  
神戸親和女子大学附属親和幼稚園

園長 澤田 愛子

# 2016 (平成 28) 年度 学校評価報告書

神戸親和女子大学附属親和幼稚園  
園長 澤田 愛子

項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	第三者評価 / 学校評価
子ども一人一人の自立に向けた力を伸ばす	・基本的生活習慣の確立	<p>食事、排泄、衣服の着脱、手洗いうがい等については、一人一人の様子を見ながら、細やかに声をかけた。また、子どもが場に応じた挨拶ができるように、教師が率先してその姿を示すよう努めた。</p> <p>「しんわだより」にも園児の様子を掲載し、基本的生活習慣の重要性について発信した。修了、進級するまでには、進んで挨拶をする。登降園の際には、自分の持ち物は自分で持ったり、身に付けたりすることを周知していく。</p>	A	<p>今後は、「親子で取り組もう」(約束表)の取組を年齢に応じて検討する。さらに家庭と連携を深め、特に小学校入学も見据えて、修了するまでには、幼稚園の準備を自分でしたり、自分で身の回りのことを進んでしたりする子どもに育てたい。また、登降園時刻を守れない親子がいるので、時間を守ることの大切さを意識付けていきたい。</p>	<p>基本的生活の確立は子どもの自立基本であることを、保護者とともに共通認識を持つ必要がある。</p> <p>そのためには、園と家庭との信頼関係を結ぶことが重要である。保護者とともに家庭での生活で心がけなければならない事柄を、子どもの育ちをとおして確認していくことが重要である。また、年齢ごとに発育発達段階が異なるので、年齢ごとに到達点を設定することで、保護者理解の促進が図れると思われる。</p>
	命を育む体験・環境体験の充実	<p>動植物の飼育栽培など、様々な環境にかかわる中で、友達の考えにふれたり、新しい考えを取り入れたりしながら、命の大切さに気付くようになってきた。特に今年度は、飼育していたウサギが病気になる、子どもたちや教師が世話をしながら回復を祈り、園児の豊かな感性を育むことにもつながった。</p> <p>年中組・年長組は、近隣のゆりのき台公園に出掛け、季節ごとに身近な自然を感じる機会を見逃さないように心掛けた。</p>	A	<p>今後も命を育む体験を積み重ねていけるよう、いろいろな場面で命について考える場を大切にしたい。</p> <p>ゆりのき台公園の環境をさらに活かし、自然の美しさ、不思議さなどに出会い、豊かな感性を高めるとともに、体験の充実に努めていきたい。</p>	<p>子ども自身が動植物を育てる環境の在り方を考え、様々な事態に遭遇しながら日々感じていける身近な環境の工夫をしていくことが大切である。身近な環境を保育に取り入れることは、自然のかかわり、地域のひとのかかわりの中で育てていく大事な保育材料であるので、継続して園周辺の環境を保育に取り入れてもらいたい。</p>
	幼児の主体性を伸ばす保育の実践	<p>子どもが自分で考え、自分で行動できるように、日々の保育の在り方や行事の取り組み方等の見直しをした。運動会や、造形展、生活発表会、修了式では、子どもの興味や関心、環境の構成等について職員間で話し合いを重ねた。様々な行事や日々の保育を通して子どもの主体性が十分に発揮されるように取り組んだ。</p>	A	<p>今後は、日々の保育の中でもアクティブ・ラーニングの三つの視点「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を踏まえた、学びの過程を意識して、保育に取り組んでいきたい。</p>	<p>子どもの主体性を育むためには、教師自身が主体的な生活を心がけなければならない。教師が主体的に物事を見る目や保育に対する姿勢そのものが重要であることを認識していく必要がある。アクティブ・ラーニングの視点を教師自身が意識し、理解して保育に取り組んでいただきたい。</p> <p>次年度以降に子どもと教師が協働して取り組むプロジェクト的な活動を保育の一環としてカリキュラムの中に位置づけることも検討してもらいたい。</p>
	人権意識の向上	<p>子どもが、相手の立場に立って考えたり、正しく善悪の判断をしたりする場を大切にしたい。また、約束やルールを守ることができるように、遊びや生活の中で、道徳性や規範意識の芽生えを培ってきた。</p>	A	<p>職員自身が常に高い人権意識をもって日々の保育にあたり、保護者とともに取り組んでいけるように努めたい。</p>	<p>子どもに規範意識を育む生活や活動を意図的に保育に組み込む必要がある。また、日々の生活の子どもの姿を通して教職員の研修の場を設けることも必要である。</p> <p>子どもたちの生活全てが、人権につながっていることを教師が理解し共通の人権意識を持って保育に取り組んでいただきたい。</p>

					また、LGBTの子どもへの配慮やダイバシティマネージメントも今後の課題である。
	配慮を要する園児への充実	配慮を要する子どもには、全教師で支援の方法を話し合い、共通理解しながら対応した。また、神戸親和女子大学教授の大島先生からも指導をうけたり、関係機関とも連携を図ったりした。	A	一人一人に適切なかかわりをしていくためにも、医師や専門機関、大学との連携を充分にとるよう心掛けたい。	全教師が共通の課題と認識する必要がある。 保護者との面談を通して、幼稚園でのサポートの在り方を探っていくことが必要である。大学や関係機関との連携を保ち、継続した検証をしていく中で、一人一人の成長を保障していくことが大切である 今後は教職員対象にインクルージョンと心のバリアフリー等の研修を検討いただきたい。
子育ての支援	地域の子育て支援のセンター的役割	「預かり保育」(月曜日～金曜日18時まで)では、おおよそ72名の様々な年齢の子どもたちと楽しい時間を過ごしている。「わくわく幼稚園」は、幼稚園や保育所に通っていない小学校入学前の子どもを対象に開催し、無理なく集団生活に慣れるように配慮している。「なかよしクラブ」は、未就園児の子どもと保護者を対象に開催し、地域の子どもの遊び場や保護者の交流の場になっている。	A	今後も安全面に配慮し、それぞれのプログラムを充実させることが必要である。特に未就園児対象の「なかよしクラブ」では、親子遊びを中心に活動をしているが、他の親子との交流遊びも積極的に取り入れて、子育ての仲間づくりを心掛けていく。また、その都度、子育て相談に応じていきたい。	「なかよしクラブ」 保護者の自尊感情を高め、保護者の自主的活動の促進が課題である。 「わくわく幼稚園」 在園児との交流の機会を設け、子どもが育つ姿を保護者にも認識できるような場としていくことが必要である。 「預かり保育」 利用者のニーズや保育内容等も検討していく必要がある。
教員の資質向上に努める	幼稚園と大学との連携	職員研修としての実技面では、音楽表現、絵画や木工などの造形表現、リズムジャンプの指導を受けている。 講義(本学の教授が、本園の教員に行う)では、4月:「教育課程」12月:「はたらくことの意味」「リズムジャンプ」2月:「子どもの心を輝かせる音と歌」「親和幼稚園のカリキュラム」の講義を通して、専門性を高めている。	A	今後は、課題に向けて、研究するとともに、積極的に公開保育を積み重ね、学び合える組織を目指していけるよう努力したい。そのためにも、毎月1回(1年10回)各学年1クラスずつ保育の様子をビデオに収録し、園内研修を試みる。	保育者がより専門的な知識や技術を習得できる研修計画が必要である。また、保育の専門性の向上を目指し、公開保育を積極的に進め、継続的な研修体制を構築していくことも必要である。今後は、保育の課題を抽出し、大学研究者との共同研究をし、附属園としての価値を高めることも検討いただきたい。
	海外の方達との触れ合う体験	6月の開設記念講演会では、名誉園長のエリザベス・モーレイ先生から子育てについての重要なお話をいただいた。保護者も真剣に耳を傾けていた。 また、イタリアからもマリア・コンソラートリーチェ学院附属幼稚園長のイザベッラ先生と、子どもたちは挨拶をしたり歌ったりして心のつながりを実感した。	B	開園にあたって、米国やカナダの附属幼稚園、小学校をもつ大学で組織される「国際附属校園協会」に加盟している。今後、子どもの自主性を重んじる世界基準の幼児教育の情報を共有し、世界を視野に入れた教育について、教師が学ぶことが重要である。	保育において、幼児期から国際感覚を育てていくことが重要である。今後は、教職員も国際感覚を身に付け、保育に生かせるよう、海外研修を実施することも検討いただきたい。

特色ある幼稚園づくりを目指す	合奏や合唱などの音楽表現	サマーコンサートや生活発表会等で歌を歌ったり、合奏したり、大学との連携を通して、音楽に親しめる環境を工夫した。	B	音楽の専門家の指導を受けることで、子どもたちは、歌ったり合奏したりすることが楽しくなっている。また、子ども自身が楽しく、夢中になって体を動かしているリズムジャンプは、体力向上につながっている。子どもたちの姿を踏まえて、今後、幼稚園の特色を具体的に教育課程に位置付けていくことが課題である。	教職員自身が、特色ある保育内容を理解し保育に還元することが必要である。 また、特色ある活動が、子どもの育ちにどう結びついているか、実態を通して検証する必要がある。
	リズムジャンプ	運動会では年長組が体でリズムを感じエグザイルの音楽に合わせて、様々なジャンプにチャレンジをして、友達と笑顔いっぱい踊った。年長組は、縄跳びも軽やかに跳ぶ子どもが増えている。			
	英語で遊ぶ	イングリッシュクラブを通して幼児期から英語に親しむ機会を作っている。生活や遊びの中で学んでいくには回数も少ない。			
家庭・地域との連携	子どもの生活や発達の連続性を踏まえた教育の推進	1学期は、1回の学級懇談会と2回の個人懇談会がある。特に1学期は、行事を通して、園児の様子を保護者に見ていただく機会を多くもっているが一つ一つの行事の見直しが必要である。 ゆりのき台小学校とは、1年生5年生との交流や児童音楽会への参観等、近隣の中学校とは、トライやる・ウィーク、高校とは、「子ども類型」「家庭科の子育ての授業」等を通して、交流を図っている。 8月の人権標語に投稿するとともに、9月の自治会主催の敬老会には、園長が出席している。	A	1学期は、行事との日にちも接近しているため、2回の個人懇談会を1回にする。また、様々な家庭事情を配慮し、母の日、父の日の参観をファミリーの日と改めて保育内容を充実させる。 今後も、近隣の小、中学校、高校との連携を深めるため、幼稚園側からも積極的にアプローチし、交流の場を増やしていくように努力する。	個人懇談会を通じて園は保護者のニーズを掴み、保育に還元する必要がある。保護者の子育て意識の向上も考え、個人懇談と学級懇談会の位置づけも検討いただきたい。 また、近隣他校種との交流のみならず、クラスを離れた異年齢保育も検討いただきたい。
情報を発信する幼稚園	情報の積極的な発信の充実	「しんわだより」を通して、その月の保育のねらいを保護者に伝えた。また、門の掲示も、保護者や一般の方々も見やすくなるよう工夫した。 ホームページを通して幼稚園生活の様子を知らせた。	A	今後は、ホームページの更新を頻繁にしていくよう努めたい。次年度は、保護者アンケートを実施し、改善できるもの、検討が必要なものから一つずつ見直していくよう努めたい。	現状の取り組みを継続するとともに、園での取り組みなどを保護者により理解いただくため、写真や図解等を使用して分かりやすく掲示するなど、さらなる工夫を検討いただきたい。 また、学級としての取り組みを発信していくことも重要である。「学級だより」や連絡帳を利用した、情報発信も検討いただきたい。
幼稚園運営	安全管理・危機管理の徹底	園庭全体が見渡せるように、防犯カメラの映像を3～4面に増やした。年間10回の避難訓練（火災、不審者、地震）を行い、様々な状況を想定した避難方法を園児に指導した。 三田消防署に依頼し、火災訓練の実施。また、三田警察署より、不審者対応について教師が訓練を受ける機会ももった。 複合遊具等の点検の結果、新しい遊具の設置工事を3月末よりすることとなった。	A	何よりも子どもの命を守るためには、今後も様々な状況を想定した避難訓練を実施したり、関係機関と連携をとり、実施訓練をしたりすることは重要である。 次年度の4月より、保護者は送迎時に保護者証を身に付けるので、防犯対策の一環であることを意識付け、危機管理意識を養っていききたい。	子どもの命を守ることは幼稚園の最も重要な使命と考えられる。防災保育の視点をカリキュラムの中に位置づけることを検討いただきたい。 また、全教職員が危機管理意識をもてるよう『安全点検』を定期的実施し、危機管理意識の啓発に努めていただきたい。